諫早市文化財調査年報Ⅰ

（平成９年度～平成17年度）

２００７

諫早市教育委員会

発刊にあたって

長崎県の中央部に位置する諫早市は、古代官道の「船越駅」の所在が想定され、近世においては長崎街道が整備されるなど、交通の要衝としての地理的な特性を活かし、その歴史を刻んできました。

埋蔵文化財の発掘調査は地域の歴史を解明していく方法の一つですが、各種開発により消失するおそれがありますので、開発を行う箇所に遺跡の所在が想定される場合、事前の発掘調査を行い、遺跡の内容を記録保存することが義務付けられています。

本書は、平成９年度から平成17年度にかけて、国庫・県費補助事業として実施した、範囲確認のための学術調査、各種開発に伴う試掘・範囲確認調査及び本調査の調査結果をまとめたものです。

調査結果については本書記載のとおりですが、今回得られました資料が本書とともに、今後の地域の歴史研究の一助として活用されるだけでなく、文化財保護への理解を深める契機となることを切に願う次第であります。

発刊にあたり、発掘調査及び整理作業に従事していただきました皆様をはじめ、関係各位に賜りました深い御理解と多大なる御協力に対しまして、心より厚くお礼申し上げます。

平成19年３月

諫早市教育委員会
教育長　峰　松　終　止

例　言

1．本書は諫早市教育委員会が、平成９年度から平成17年度にかけて国・県の補助を受けて実施した埋蔵文化財の発掘調査（範囲確認のための学術調査、各種開発に伴う試掘・範囲確認調査、本調査）の調査結果を掲載したものである。ただし、滑川遺跡について実施した平成18年度の補足調査についても併せて掲載した。

2．調査は、諫早市教育委員会　文化課　秀島　貞康・川瀬　雄一・古賀　力が担当した。調査体制については「第Ⅰ章　調査の概要　３　調査体制」を参照されたい。

3．調査による出土遺物、調査及び整理作業にかかる図面・写真類は諫早市教育委員会が管理し、諫早市郷土館で保管している。

4．詳細については各項の例言を参照されたい。

5．本書の総括編集は川瀬が行った。

総　目　次

第Ⅰ章　調査の概要……1
1　諫早市の位置と歴史的環境……1
2　調査概要……1
3　調査体制……3
第Ⅱ章　調査の成果……5
1　範囲確認のための学術調査……5
①　風観岳支石墓群（平成９年度～平成16年度）……5
②　溝口遺跡（平成17年度）……7
③　滑川遺跡（平成17・18年度）……45
2　各種開発に伴う試掘・範囲確認調査……75
3　開発に伴う本調査……121
①　有喜・上原遺跡（平成16・17年度）……121
報告書抄録

第Ⅰ章　調査の概要

1　諫早市の位置と歴史的環境

諫早市は、長崎県本土部のほぼ中央に位置し、「県央地域」とも言われ、東に有明海、西に大村湾、南に橘湾の、三方を海に囲まれた地峡部にある。長崎半島、西彼杵半島、島原半島の結節部にあたり、古代官道の「船越駅」の存在が想定されている。近世に入ってからは長崎街道やこれに伴う宿場が整備されるなど、古くから交通の要衝としての重要な役割を果たして発展してきた。また、国道34号線（長崎～鳥栖）・57号線（長崎～島原～大分）・207号線（時津～小長井～佐賀）・251号線（諫早～国見～加津佐～長崎）の国道各線及び長崎自動車道（高速道路）、さらにＪＲ長崎本線・大村線、島原鉄道が諫早駅で交差するなど、現在においても交通の要衝となっている。

諫早市の位置

古代の律令制下では高来郡（一部は彼杵郡）に属し、鎌倉時代の『八幡宇佐神宮領大鏡』に「伊佐早村」として初出、南北朝期の争乱を経て、西郷氏が統治した。天正15（1587）年に筑後柳河の龍造寺氏が攻め入り、姓を「諫早」と改め、江戸時代を通じて諫早家は佐賀藩の「御親類同格」の「佐賀藩諫早領」として藩政の一翼を担った。

諫早市域の地形は、大別して、北部を占める多良火山系の五家原岳（1058m）を頂点とした火山山麓地域、南部を占める古第三紀層、溶岩円頂丘、そして溶岩台地からなる標高300m以下の丘陵地域、そして両地域に挟まれた平野及び両地域内に介在する低地地域に分けられる。

市の中央部を流れる本明川は、五家原岳を源流とし、市街地を通って有明海に注ぎ、下流にある諫早平野は県下最大の穀倉地帯となっている。この平野は中世以降の干拓によって形成されている。

2　調査概要

①範囲確認のための学術調査

平成９年度から16年度に実施した風観岳支石墓群（破籠井町・下大渡野町）、平成17年度に実施した溝口遺跡（高来町）、滑川遺跡（貝津町）の３件である。

風観岳支石墓群は諫早市と大村市の市境にある風観岳（標高236m）稜部に分布する弥生時代早期の支石墓群である。昭和45年に発見され、昭和50年に長崎県教育委員会が発掘調査を行っ

た（註１）。調査の結果、支石墓20基が存在し、下部構造は箱式石棺と土壙であることが確認された。その後、諫早市教育委員会が調査主体となり、支石墓の基数、分布範囲、所属時期、下部構造のあり方を捕捉することを目的として、平成９年度から16年度までの８次にわたる調査を行った。調査の結果、100基を越える支石墓が存在し、風観岳山頂部には石材供給地があることなどが確認された（註２・３）。

溝口遺跡と滑川遺跡はいずれも耕作中に箱式石棺墓が発見されたことがきっかけとなったものである。溝口遺跡では当初、箱式石棺墓２基が発見されたが、調査の結果、合計３基の箱式石棺墓と石蓋土壙墓、集石遺構などが発見された。滑川遺跡では当初、箱式石棺墓１基、棺内部から小型の壺が発見されたが、調査の結果、箱式石棺墓３基・甕棺墓２基が発見された。その後、新たに箱式石棺墓が発見されたため、平成18年度に補足調査を行い、箱式石棺墓は合計４基となった。

②各種開発に伴う試掘・範囲確認調査

平成10年度から17年度にかけて実施した各種開発に伴う調査は、23遺跡、４包蔵地外で行い、件数としては範囲確認調査35件、試掘調査５件の合計40件である。内訳は、民間事業31件、公共事業９件である。

調査原因については個人専用住宅と宅地造成が５件と最も多く、次に多いのが携帯電話中継局・共同住宅・店舗でそれぞれ４件であった。遺跡ごとの調査件数については、田井原条里遺跡が８件と最も多く、次に上峰原遺跡の３件であった。

調査後の措置としては、工事着手32件、現状保存３件、要本調査５件であった。試掘・範囲確認調査の結果、本調査が必要と判断したものは、開城跡（上大渡野町・下大渡野町、平成11・12年度）、貝津横鳥Ｂ遺跡（貝津町、平成16年度）、有喜・上原遺跡（松里町、平成16年度）の３遺跡であった。

③開発に伴う本調査

個人専用住宅建設に伴って平成16年度に範囲確認調査を実施した有喜・上原遺跡について、平成16・17年度にかけて本調査を実施した。調査の結果、弥生時代後期の甕棺墓３基、古墳時代前期の竪穴住居跡２棟、13～14世紀の建物跡などが確認された。

註１　田川　塾ほか　1976『風観岳支石墓群』諫早市文化財調査報告書第１集
諫早市教育委員会

註２　川瀬雄一ほか　2002『風観岳支石墓群発掘調査概要報告書』諫早市文化財調査報告書第15集
諫早市教育委員会

註３　秀島貞康ほか　2006『風観岳支石墓群発掘調査報告書』諫早市文化財調査報告書第19集
諫早市教育委員会

3　調査体制

平成９年度から17年度にかけての調査体制については下記のとおりである。

調査体制

諫早市教育委員会

教育長	立山　司	（H９．４．１～H12．９．30）
	前田　重寛	（H12．10．１～H16．９．30）
	峰松　終止	（H16．10．１～　）
教育次長	田中　司郎	（H９．４．１～H10．８．31）
	崎田　晃生	（H10．９．１～H11．３．31）
	田嶋　将	（H11．４．１～H14．３．31）
	田鶴　俊昭	（H14．４．１～H17．４．30）
	平野　博	（H17．５．１～　）
文化課長	國井　政武	（H９．４．１～H14．３．31）
	下川　政子	（H14．４．１～H16．３．31）
	松本　玉記	（H16．４．１～　）
参事	永渕　高信	（H17．３．１～H18．３．31）
課長補佐	下川　政子	（H10．４．１～H11．３．31）
	山口　廣義	（H11．４．１～H15．３．31）
	松本　玉記	（H15．４．１～H16．３．31）
	川内　順史	（H16．４．１～　）
参事補	秀島　貞康	（H９．４．１～調査担当、現在参事）
主任	内田紀代子	（H11．７．１～H13．３．31）
	正法地邦彦	（H15．７．１～H18．３．31）
事務職員	川瀬　雄一	（H９．４．１～調査担当、現在主任）
調査員	古賀　力	（H９．４．１～調査担当）
	橋本　幸男	（H９．４．１～調査担当）

範囲確認のための学術調査

番号	枝番号	調査年度	遺跡名	調査地	調査原因	調査期間	調査面積(㎡)	調査区分	調査後措置	調査担当者
1	1	9	風観岳支石墓群①	諫早市破籠井町971ほか	範囲確認	H9.8.6～10.8	207	範囲確認	現状保存	秀島 貞康
	2	10	風観岳支石墓群②	諫早市破籠井町971ほか	範囲確認	H10.8.17～10.29	181	範囲確認	現状保存	秀島 貞康
	3	11	風観岳支石墓群③	諫早市破籠井町971ほか	範囲確認	H11.7.28～10.15	396	範囲確認	現状保存	秀島 貞康
	4	12	風観岳支石墓群④	諫早市破籠井町971ほか	範囲確認	H12.12.4～H13.2.27	483	範囲確認	現状保存	秀島 貞康
	5	13	風観岳支石墓群⑤	諫早市破籠井町971ほか	範囲確認	H13.7.10～10.11	593	範囲確認	現状保存	秀島 貞康
	6	14	風観岳支石墓群⑥	諫早市破籠井町971ほか	範囲確認	H14.10.1～12.25	408	範囲確認	現状保存	秀島 貞康
	7	15	風観岳支石墓群⑦	諫早市破籠井町971ほか	範囲確認	H15.9.9～H16.1.15	470	範囲確認	現状保存	秀島 貞康
	8	16	風観岳支石墓群⑧	諫早市破籠井町971ほか	範囲確認	H16.7.26～11.10	148	範囲確認	現状保存	秀島 貞康
2		17	溝口遺跡	諫早市高来町馬渡114	範囲確認	H17.9.20～10.28	80	範囲確認	現状保存	川瀬 雄一
3	1	17	滑川遺跡①	諫早市貝津町782	範囲確認	H18.2.21～3.20	44	範囲確認	現状保存	川瀬 雄一
	2	18	滑川遺跡②	諫早市貝津町782	範囲確認	H18.5.22～5.31	3	範囲確認	現状保存	川瀬 雄一

各種開発に伴う試掘・範囲確認調査

番号	枝番号	調査年度	遺跡名	調査地	調査原因	調査期間	調査面積(㎡)	調査区分	調査後措置	調査担当者
1		10	有喜・上原遺跡	諫早市松里町124	個人住宅建設	H10.6.29～7.6	38	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
2	1	10	上峰原遺跡①	諫早市栄田町361-2	個人住宅建設	H10.11.24～11.27	23	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
	2	13	上峰原遺跡②	諫早市栄田町376-1ほか	個人住宅・店舗建設	H13.9.25～10.2	10	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
	3	17	上峰原遺跡③	諫早市下大渡野町63-1ほか	個人住宅建設	H17.6.6～6.8	40	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
3		10	平山遺跡	諫早市平山町374	携帯電話中継局建設	H11.2.22～3.3	140	範囲確認	工事実施	秀島 貞康
4		11	土師野尾遺跡	諫早市土師野尾町2007	携帯電話中継局建設	H11.7.13～7.22	34	範囲確認	工事実施	秀島 貞康
5		11	源点遺跡	諫早市目代町737-1ほか	病院建設	H11.10.20～10.25	140	範囲確認	工事実施	秀島 貞康
6		11	源内谷遺跡	諫早市小川町455-1ほか	宅地造成	H11.10.20～10.26	30	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
7		11	堤の岩遺跡	諫早市天神町927-1	農道建設	H11.11.9	8	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
8		11	滑川遺跡	諫早市久山町1909ほか	河川改修	H12.1.11～1.21	60	範囲確認	工事実施	秀島 貞康
9	1	11	黒城跡①	諫早市下大渡野町2260ほか	圃場整備	H12.2.22～3.27	198	範囲確認	本調査	秀島 貞康
	2	12	黒城跡②	諫早市下大渡野町2260ほか	圃場整備	H13.1.17～3.19	234	範囲確認	本調査	秀島 貞康
	3	14	黒城跡③	諫早市下大渡野町2260ほか	圃場整備	H14.6.25～H15.3.25	14,500	本調査	工事実施	秀島 貞康
10		12	風穴谷・山留阪遺跡	諫早市大場町803-1	工場建設	H12.9.18～9.28	140	範囲確認	工事実施	秀島 貞康
11	1	12	田井原条里遺跡①	諫早市幸町323ほか	共同住宅建設	H12.11.10	23	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
	2	12	田井原条里遺跡②	諫早市仲沖町263-1ほか	工場建設	H12.12.15	90	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
	3	14	田井原条里遺跡①	諫早市幸町207-1	共同住宅建設	H14.4.30	3	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
	4	14	田井原条里遺跡②	諫早市仲沖町274-1ほか	病院建設	H14.8.16	40	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
	5	14	田井原条里遺跡③	諫早市仲沖町284-1ほか	宅地造成	H14.12.17～H15.1.17	135	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
	6	14	田井原条里遺跡④	諫早市幸町311-3	店舗建設	H15.1.15～1.16	20	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
	7	15	田井原条里遺跡①	諫早市幸町306-1ほか	病院建設	H15.11.26	40	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
	8	15	田井原条里遺跡②	諫早市幸町301-4	土地売却	H16.1.26	90	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
12		12	永昌遺跡	諫早市永昌町344-1ほか	宅地造成	H12.11.13～11.16	24	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
13		13	旧長崎刑務所跡地	諫早市野中町508-1ほか	土地売却	H13.4.10～4.25	140	試掘	工事実施	秀島 貞康
14	1	12	小野条里遺跡①	諫早市宗方町1126	店舗建設	H13.3.18～3.30	40	範囲確認	工事実施	秀島 貞康
	2	14	小野条里遺跡②	諫早市川内町2648-3	土地売却	H15.1.22	9	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
15	1	13	小栗C地点遺跡①	諫早市小川町760-2ほか	宅地造成	H14.3.12～3.25	34	範囲確認	現状保存	川瀬 雄一
	2	14	小栗C地点遺跡②	諫早市小川町760-2ほか	宅地造成	H14.4.22～4.24	14	範囲確認	現状保存	川瀬 雄一
16		14	菅牟田池遺跡	諫早市福田町964-1ほか	圃場整備	H14.5.8～5.28	45	範囲確認	工事着工・一部保存	川瀬 雄一
17		14	宮崎鉛遺跡	諫早市小野町494-1ほか	共同住宅建設	H15.2.12	8	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
18		15	上横道遺跡	諫早市目代町190-3ほか	土地売却	H15.5.1～5.12	28	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
19		16	大野台遺跡	諫早市本野町937-2	土砂採取	H16.8.6～8.11	32	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
20		16	貝津郷高B遺跡	諫早市貝津町1288-3ほか	工業団地造成	H16.9.16～10.18	56	範囲確認	本調査	川瀬 雄一
21		16	有喜・上原遺跡	諫早市松里町114-2	個人住宅建設	H16.10.27～11.2	40	範囲確認	本調査	川瀬 雄一
22	1	16	諫早南部区画地内遺跡確認調査(第1次)	諫早市上野町1126ほか	区画整理	H17.3.18～3.30	143	試掘	工事実施	秀島 貞康
	2	17	諫早南部区画地内遺跡確認調査(第2次)	諫早市上野町1127ほか	区画整理	H18.2.7～3.24	129	試掘	工事実施	秀島 貞康
23		17	開遺跡	諫早市飯盛町1915-1	店舗建設	H17.6.3	10	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
24		17	小栗B地点遺跡	諫早市小川町214-1	携帯電話中継局建設	H17.6.21～6.22	28	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
25		17	周知外遺跡①	諫早市貝津町1595-1ほか	店舗建設	H17.6.30	40	試掘	工事実施	川瀬 雄一
26		17	小栗A地点遺跡	諫早市小川町201-1ほか	共同住宅建設	H17.7.25～7.29	27	範囲確認	工事実施	川瀬 雄一
27		17	周知外遺跡②	諫早市長野町1168-2ほか	携帯電話中継局建設	H17.10.19～10.20	4	試掘	工事実施	川瀬 雄一

開発に伴う本調査

番号	枝番号	調査年度	遺跡名	調査地	調査原因	調査期間	調査面積(㎡)	調査区分	調査後措置	調査担当者
1	1	16	有喜・上原遺跡	諫早市松里町114-2	個人住宅建設	H17.3.2～3.30	250	本調査	工事実施	秀島 貞康
	2	17	有喜・上原遺跡	諫早市松里町114-2	個人住宅建設	H17.4.11～6.10		本調査	工事実施	秀島 貞康

調査箇所一覧表

第Ⅱ章　調査の成果

1　範囲確認のための学術調査

①　風観岳支石墓群

1．風観岳支石墓群（ふうかんだけしせきぼぐん）

1．調　査　地　諫早市破籠井町・下大渡野町
2．調査原因　学術調査
3．調査期間　第1次　平成9年8月6日～10月8日
　　第2次　平成10年8月17日～10月29日
　　第3次　平成11年7月28日～10月15日
　　第4次　平成12年12月4日～平成13年2月27日
　　第5次　平成13年7月10日～10月11日
　　第6次　平成14年10月1日～12月25日
　　第7次　平成15年9月9日～平成16年1月15日
　　第8次　平成16年7月26日～11月10日
4．調査面積　第1次207㎡　第2次181㎡　第3次396㎡　第4次483㎡
　　第5次593㎡　第6次408㎡　第7次470㎡　第8次148㎡
5．調査区分　学術調査
6．調査後措置　現状保存
7．調査担当者　秀島　貞康、川瀬　雄一

調査の詳細については、
1．「風観岳支石墓群発掘調査概要報告書」『諫早市文化財調査報告書』第15集　2002
2．「風観岳支石墓群発掘調査報告書」『諫早市文化財調査報告書』第19集　2006
　に掲載している。

② 溝口遺跡（みぞぐちいせき）

例　言

1．溝口遺跡は諫早市高来町字馬渡114に所在する。
2．調査期間は平成17年９月20日～10月28日である。
3．調査面積は80㎡である。
4．調査及び整理作業にかかる図面・写真類は諫早市教育委員会が管理し、諫早市郷土館で保管している。
5．本書に使用したレベルは海抜高であり、方位は磁北である。
6．発掘調査は諫早市教育委員会が実施した。

教 育 長　峰松　終止
教育次長　平野　博
文化課長　松本　玉記
課長補佐　川内　順史
参 事 補　秀島　貞康（現在、参事）
事務職員　川瀬　雄一（調査・整理作業担当、現在主任）

7．石棺出土人骨の現地での取り上げについては、分部哲秋・佐伯和信・岡本圭史各氏（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科　生命医科学講座）にお願いした。また、各氏からは人骨に関する玉稿を賜った。
8．本書の執筆・編集は川瀬が行った。

目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……11
第１節　地理的環境……11
第２節　歴史的環境……11
Ⅱ　調査の経過……12
第１節　調査に至る経緯……12
第２節　調査の方法……12
第３節　層位……12
Ⅲ　調査の記録……16
第１節　遺構……16
１．１号箱式石棺墓……16
２．２号箱式石棺墓……16
３．３号箱式石棺墓……18
４．石蓋土壙墓……18
５．溝状遺構……18
６．集石遺構……18
７．ピット……19
８．土壙……25
第２節　遺物……25
１．土器……25
２．その他の遺物……28
Ⅳ　まとめ……29
Ⅴ　溝口遺跡１号箱式石棺墓出土の古墳時代人骨……31

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図（Ｓ－１/25,000）……13
第２図　調査位置図（Ｓ－１/5,000）……13
第３図　土層図（Ｓ－１/50）……14
第４図　遺構配置図（Ｓ－１/200）……15
第５図　１号箱式石棺墓とピット実測図（Ｓ－１/20）……17
第６図　２号箱式石棺墓実測図（Ｓ－１/20）……19
第７図　３号箱式石棺墓とピット実測図（Ｓ－１/20）……20

第８図　石蓋土壙墓実測図（Ｓ－１/20)……21
第９図　溝状遺構①とピット実測図（Ｓ－１/20)……22
第10図　集石遺構実測図（Ｓ－１/25)……23
第11図　ピットと土壙・溝状遺構②実測図（Ｓ－１/20)……24
第12図　ピット実測図（Ｓ－１/20)……24
第13図　土器実測図（Ｓ－１/３)……27
第14図　その他の遺物実測図（Ｓ－２/３)……28

表　目　次

第１表　周辺遺跡地名表……13
第２表　出土遺構一覧表……18
第３表　トレンチ別遺物一覧表……25
第４表　出土遺物観察表……28

図　版　目　次

図版１　遺跡近景（上段)、１号箱式石棺墓と２号箱式石棺墓（下段)……37
図版２　１号箱式石棺墓と２号箱式石棺墓（上・下段）……38
図版３　１号箱式石棺墓と２号箱式石棺墓（上段)、３号箱式石棺墓（下段)……39
図版４　石蓋土壙墓（上・下段）……40
図版５　石蓋土壙墓と３号箱式石棺墓（上段)、溝状遺構①とピット（下段)……41
図版６　集石遺構（上段)・１号集石（下段)……42
図版７　２号集石（上段)・３号集石（下段)……43
図版８　出土遺物……44

Ⅰ　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

諫早市、西彼杵郡多良見町、北高来郡森山町、飯盛町、高来町、小長井町の１市５町は、平成17年３月１日の合併により、新たに「諫早市」となった。

今回調査を行った高来町は、東西約６㎞、南北約10kmで、東部は小長井町に接し、北西部は佐賀県藤津郡太良町に接する。南部は有明海に面し、海岸沿いにはＪＲ長崎本線と国道207号線が通る。

五家原岳（1058m）を頂点とする多良山系から派生した数条の尾根と５本の小河川により形成された扇状地からなり、多良山系に源を発する水系は幾多の渓谷をつくって南東に向かい、扇状地を形成して有明海に注いでいる。地質は多良岳火山類の噴出により、山岳部は角閃石安山岩、裾野は輝石安山岩が分布し、低部は火山砕屑岩によって覆われている。平野部は河川の氾濫による沖積平野である。

溝口遺跡は、境川の東岸、標高14～18mの平坦地にあり、弥生土器、土師器、須恵器、中世の輸入陶磁器などが広い範囲に分布している。今回の調査地は国道207号沿いの畑地で、標高13mほどの箇所である（第１・２図、図版１）。

第２節　歴史的環境（第１図）

本遺跡と同じく境川の東岸の扇状地に立地する遺跡としては、泉遺跡と西の前遺跡が知られている（註１）。

泉遺跡は、境川下流域東岸の標高10mほどにある。土地改良以前には小高い丘があり、弥生時代中期の土器や縦1.2m、横60cm、厚さ40cmの線刻のある大石が出土した。大石には幾何学的な線刻があり、古墳の石材と思われる。西の前遺跡は標高16mの地点にある。昭和２年に「長さ６尺５寸、幅３尺、深さ２尺５寸、蓋石は厚さ２寸ないし３寸」の箱式石棺墓が発見された。石棺の規模から、古墳時代前期のものと考えられている。

今回の調査地から西へおよそ３㎞の小江川の東岸にある中江遺跡、上田井原遺跡も弥生時代～古墳時代の遺跡として知られ、過去に発掘調査が行われている（註２）。

中江遺跡は、多良山系から南側に延びた尾根の先端部分、標高10～35mに位置する。平成３年の中江地区の圃場整備工事中に石棺が発見され、同年、長崎県教育委員会により発掘調査が行われた。弥生時代後期から古墳時代（５世紀中頃）にかけての箱式石棺墓15基、石蓋土壙墓３基、石棺系石室１基の計19基が確認された。

上田井原遺跡は、小江川によって形成された標高６～13mの沖積台地上に立地する。上田井原地区の農業基盤整備事業に伴って、長崎県教育委員会が平成２年に範囲確認調査、翌年に本調査を実施した。板付Ⅱ式併行期の壺や「亀ノ甲タイプ」の刻目突帯文土器などの弥生時代前期～中期初頭の良好な一括資料が出土、このほかに縄文時代晩期の文化層と５世紀代を主とす

る土師器の廃棄跡などが出土した。6世紀代の須恵器も出土している。

註1　高来町　1987『高来町郷土誌』

註2　高野晋司　1993『中江遺跡・上田井原遺跡』高来町文化財調査報告書第1集　高来町教育委員会

Ⅱ　調査の経過

第1節　調査に至る経緯

平成17年6月24日、今回調査地の耕作者から「耕作中に石棺が出土した。」との通報があった。現地に急行し、確認したところ、大小2基の箱式石棺墓が並んでいるのを確認した（1号・2号箱式石棺墓、第5・6図）。耕作者によると従来からトラクターの爪が石に当たっていたとのことである。

国道の北側には周知の埋蔵文化財包蔵地「濡口遺跡」があるが、今回発見された箇所はゾーニングの範囲外であった。そこで、今回の発見を機に、時期・基数などの確認を目的とする調査を地権者の承諾を得て実施することとなった。

第2節　調査の方法

調査は、既に露出していた1号・2号箱式石棺墓周辺の精査と墓域などの確認を目的とした。調査地の東側については耕作に影響があるため、西側部分に限定して実施した（第4図）。

トレンチは、1号・2号箱式石棺墓の長軸に合わせて2～6Tを設定、ほかに1・7～9Tを同一方向で設定、1～9Tの合計9本を設定した。掘削は表土剥ぎからすべて人力で行い、埋め戻しについては重機を使用した。

出土した遺構については現状保存が見込まれることから石材の抜き取りなどは行わず、調査終了後に埋め戻しを行った。

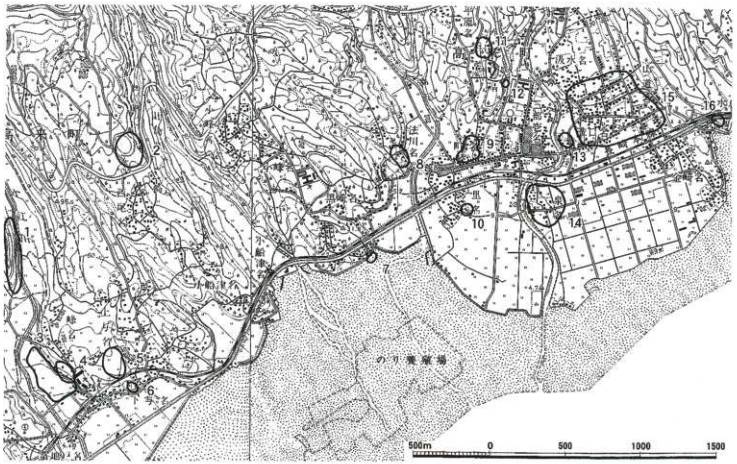
遺物の取り上げについては層位ごとで行った。

遺構及び土層図は1／10で、遺構の位置関係についての平板測量は1／100で行った。遺構の検出状況などの記録写真は、35㎜の白黒・リバーサルフィルムで行い、35㎜カラーフィルムを適宜使用した。

第3節　層　　位（第3図）

現在の地表面は標高13mほどで、現地形はわずかに東側が高い。

基本的な層位は、1層－耕作土、2層－黄褐色粘質土、3層－褐色砂質土（遺物包含層）、4層－黄土色砂質土であるが、3Tの東壁においては3層が見られない。層厚は1～3層ともに20cmほどであるが、調査地の南側（1・6・8・9T）では3層が30～40cmとやや厚く堆積している。

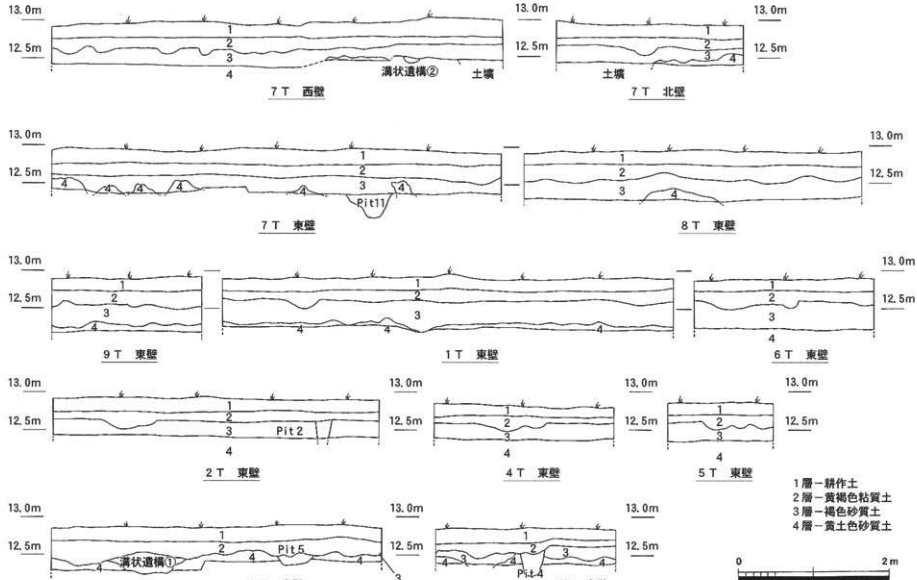


第１図　周辺遺跡分布図（S－1/25,000）

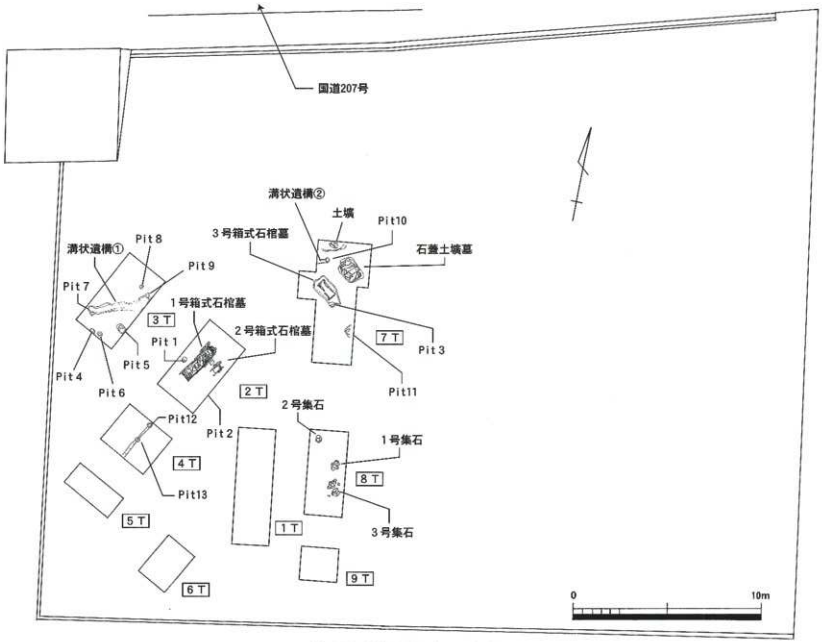
番号	名　称	種　別	立　地	時　代	番号	名　称	種　別	立　地	時　代
1	小江城跡	城跡	丘　陵	中世	9	武田城跡	城跡	台　地	中世
2	大木谷池遺跡	遺物包含地	池周辺	縄文・弥生	10	鍛冶屋間遺跡	製鉄跡	丘　陵	中世
3	上田井原遺跡	遺物包含地	沖積地	弥生・古墳	11	尾元遺跡	遺物包含地	丘　陵	縄文
4	田岡遺跡	墳墓	台　地	古墳	12	峯神さん古墳	古墳	丘　陵	古墳
5	中江遺跡	墳墓	丘　陵	弥生・古墳	13	西ノ前遺跡	墳墓	扇状地	弥生・古墳
6	萬福寺跡	寺跡	台　地	近世	14	泉遺跡	遺物包含地	丘　陵	弥生・古墳
7	釜場中干潟遺跡	遺物包含地	海　底	縄文	15	**清口遺跡**	**遺物包含地**	**扇状地**	**旧石器～中世**
8	天神ノ尾城跡	城跡	丘　陵	中世	16	水の浦城跡	城跡	台　地	中世

第１表　周辺遺跡地名表

第２図　調査位置図（S－1/5,000）


13.0m
12.5m
1
2
3
4
溝状遺構②
土壙
7T 西壁
7T 北壁
Pit11
7T 東壁
8T 東壁
9T 東壁
1T 東壁
6T 東壁
Pit2
2T 東壁
4T 東壁
5T 東壁
溝状遺構①
Pit5
3T 東壁
Pit4
3T 南壁
1層－耕作土
2層－黄褐色粘質土
3層－褐色砂質土
4層－黄土色砂質土
0
2m

第3図 土層図（S－1/50）



第4図　遺構配置図（S－1/200）

当初発見された箱式石棺墓の上面は3層の上部にあるが、トラクターの爪が棺材に当たっていたことからも、耕作の影響は3層の上面まで及んでいると思われる。これは土層図からも明らかであり、2層と3層の間は部分的に波状になっている。

遺構には3層から掘りこんでいるもの（1・2号箱式石棺墓）と、4層から掘りこんでいるもの（3号箱式石棺墓、石蓋土壙墓）の2種類があり、これは時期差を示すものであろう。

土層図はすべてのトレンチの4面について作図したが、同一方向で設定した7～9Tと2・4・5Tを一連のものと捉え、本報告では基本的に各トレンチの東壁を掲載している。遺構が壁面にかかっている3・7Tについては、東壁以外の土層図も掲載した。

Ⅲ　調査の記録

第1節　遺　　構

箱式石棺墓3基、石蓋土壙墓1基、溝状遺構2条、ピット13基、集石遺構3基を検出した（第4図）。

1．1号箱式石棺墓（第5図、図版1～3）

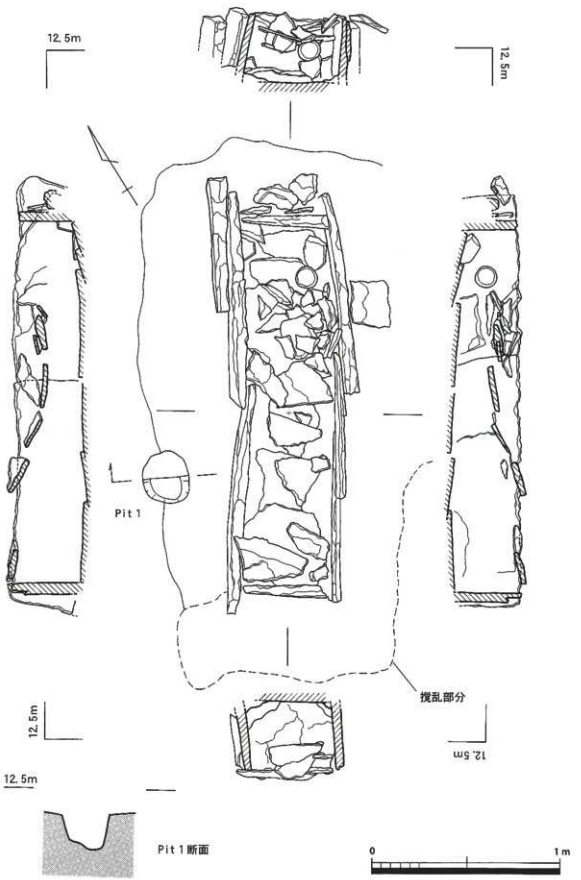
2Tにおいて検出された。耕作中に発見された石棺の一つである。石棺の法量（内法で計測。以下同じ。）は、長軸1.9m、短軸45cm、深度35cmを測る。主軸はN－33°－Eである。左右の側壁には70cm～120cmの板状石を用い、片側が3枚で組まれている。側壁材の端部を少しずつ重ねる「よろい重ね」の形態で、側壁が小口板を挟み込む形態である。床には6枚の板状石を敷いている。側壁と床材との間には粘土を充填している。石材は安山岩である。

側壁上部には、耕作の際につけられたトラクターの傷跡が見られる。蓋石は残っていないが、棺内からは蓋石の残欠であろう板状石が多数出土した。また、棺内からは人骨が出土したが、遺存状況はやや悪いという状況であった。

発見時の掘削のため、掘り方の北側部分については不明である。西側に近接してピット1があり、石棺の掘り方を切っている。隣接して2号箱式石棺墓がある。

2．2号箱式石棺墓（第6図、図版1～3）

2Tにおいて検出された。耕作中に発見された石棺の一つである。長軸40cm、短軸25cm、深度15cmを測り、非常に小型である。主軸はN－35°－Eである。左右の側壁には40cm～50cmの板状石を用い、西側3枚、東側2枚で組まれている。側壁材の端部を少しずつ重ねる「よろい重ね」の形態で、側壁が小口板を挟み込む形態である。南側の小口は消失している。床には板状石1枚を敷いている。石材は安山岩である。蓋石は残っていない。掘り方は発見時の掘削により、不明である。1号箱式石棺墓に近接し、かつ主軸を揃えており、付随しているように思われる。



第5図　1号箱式石棺墓とピット実測図（S－1/20）

	トレンチ	法量（単位：cm）			主軸方位	副葬品	備　考
		長さ	幅	深さ			
1号箱式石棺墓	2	190	45	35	N－33°－E	なし	蓋石なし・人骨
2号箱式石棺墓	2	40＋	25	15	N－35°－E	なし	蓋石なし・南側小口消失
3号箱式石棺墓	7	90	37	25	N－53°－W	なし	小口板のみ
石蓋土壙墓	7	85	30	25	N－45°－W	なし	墓壙2段掘り

第2表　出土遺構一覧表

3．3号箱式石棺墓（第7図、図版3）

7Tにおいて調査中に新たに発見された。50cmの板状石の小口板のみが残っており、側壁は抜き跡のみが認められた。長軸90cm、短軸37cm、深度25cmを測る。主軸はN－53°－Wである。南側に近接してピット3があり、石棺の掘り方を切っている。掘り方は長軸1.8m、短軸90cmである。隣接して石蓋土壙墓があり、主軸を揃えている。

4．石蓋土壙墓（第8図、図版4）

7Tにおいて調査中に新たに発見された。3号箱式石棺墓に隣接する。蓋石は1層3枚。土壙は2段掘りで、上部は長軸1.4m、短軸90cmで、墓壙は長軸85cm、短軸30cm、深度25cmを測る。主軸はN－45°－Wで、3号箱式石棺墓と主軸を揃えている。

5．溝状遺構（第9・11図、図版5）

3T（①）と7T（②）において検出された。

①は東西方向に走り、幅は40～45cm、深さ20cm。東端はトレンチの東壁にかかっている。検出した長さは3mである。遺構内の西端部にピット4、東壁側にピット9がある。周辺で、4基のピット（ピット5～8）が検出された。

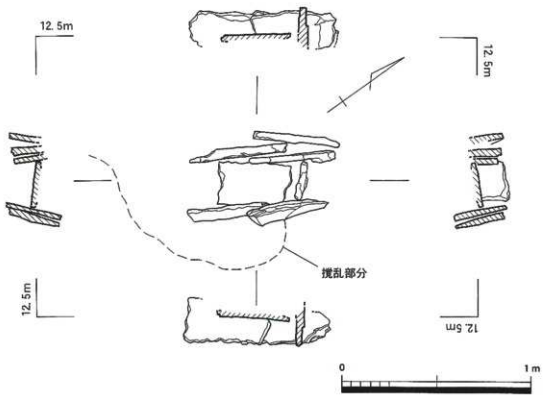
②3号箱式石棺墓、石蓋土壙墓の北側に隣接する。東西方向に走り、幅は20cm、深さ10cmの浅い皿状。トレンチの西壁にかかっている。検出した長さは60cmである。遺構内の東端部にピット10がある。

6．集石遺構（第10図、図版6～7）

8Tにおいて3基が検出された（1号～3号集石）。いずれも直径15～20cm、深さ20cmのピットの周囲に20～30cm大の円礫を配している。

①1号集石

3基の集石の中央にある。15cm大2個、20cm大1個、30cm大1個の4個の円礫で周囲を囲う。ピットの直径15cm、深さ20cm。



第６図　２号箱式石棺墓実測図（Ｓ－1/20）

②２号集石

３基の集石の北側にある。10cm大１個、15cm大１個、20cm大１個、25cm大１個の４個の円礫で周囲を囲う。北側の礫は、立石となっている。ピットの直径15cm、深さ20cm。

③３号集石

３基の集石の南側にある。20cm大２個、30cm大１個の３個の円礫で周囲を囲う。ピットの直径20cm、深さ20cm。

７．ピット（第５・７・９・11・12図）

２Ｔで２基（ピット１・２）、３Ｔで６基（ピット４～９）、７Ｔで３基（ピット３・10・11）、４Ｔで２基（ピット12・13）の計13基が検出された。

ピット１は直径25cm、深さ20cm。１号箱式石棺墓の掘り方を切っている。

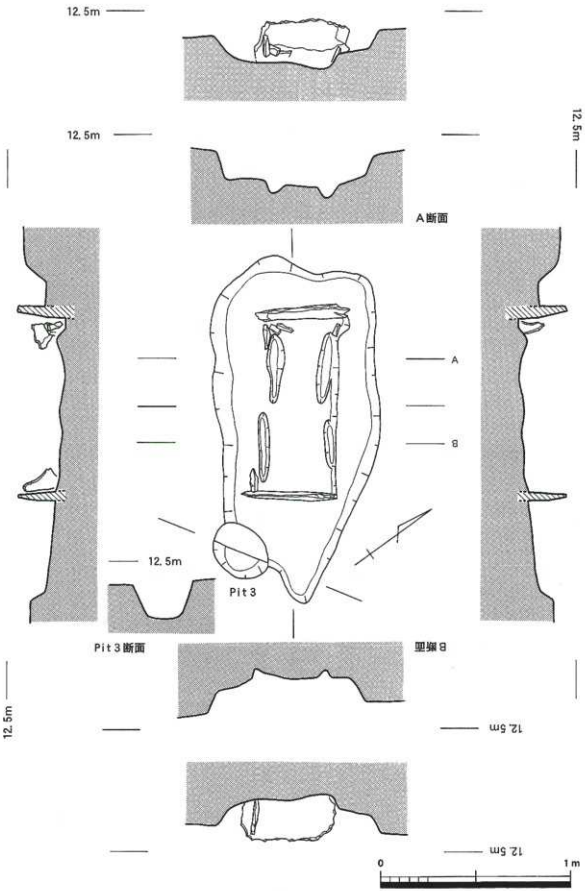
ピット２は直径25cm。２Ｔ東壁の断面において確認された。

ピット３は直径30cm、深さ20cm。３号箱式石棺墓の掘り方を切っている。

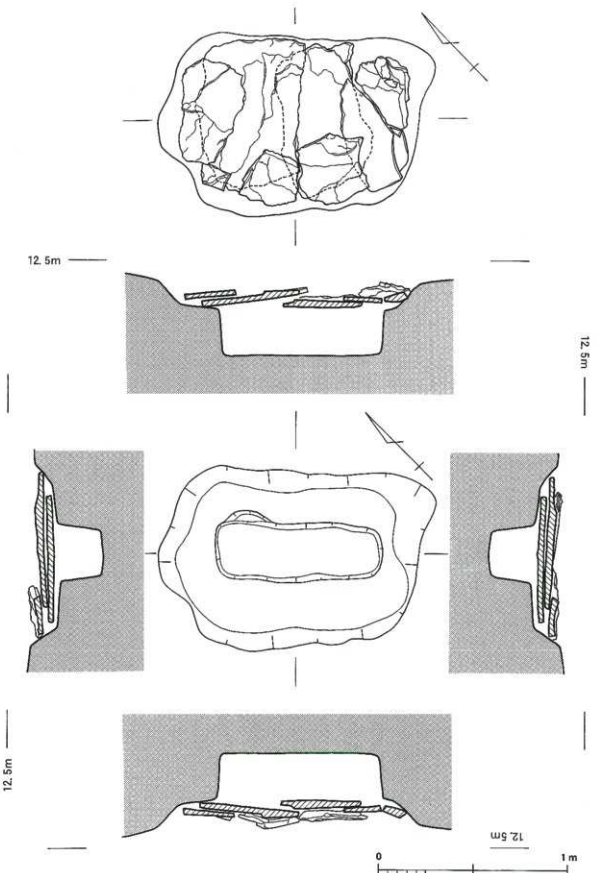
ピット４は直径30cm、深さ30cm。３Ｔ南壁の断面において確認された。

ピット５は溝状遺構①の南側にある。北側がトレンチの壁にかかっているので詳細は不明であるが、溝状遺構①②のように、溝の端部にピットを掘る、という同様の遺構である可能性もある。直径20～30cm。北側からの深さ18cm。南側からの深さ10cm。

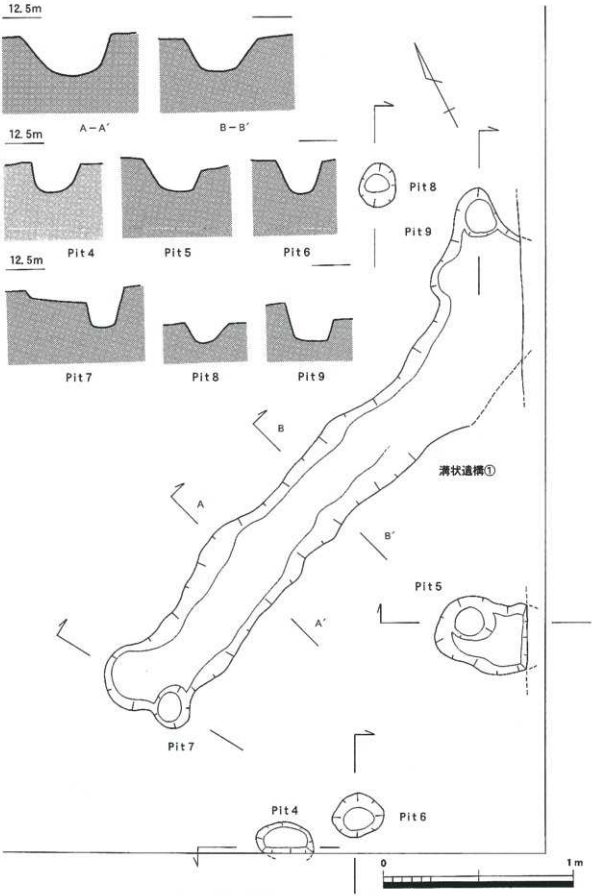
ピット６は溝状遺構①の南側にある。直径25cm、深さ15cm。



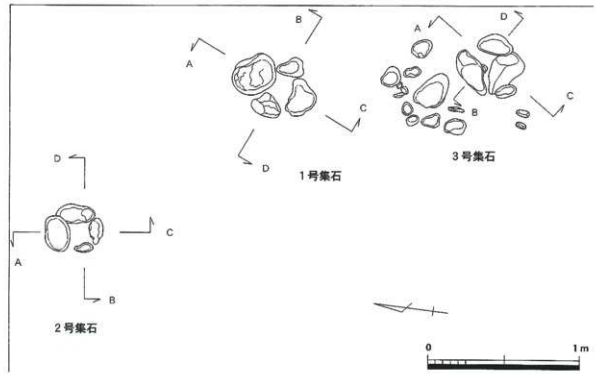
第7図　3号箱式石棺墓とピット実測図（S＝1/20）

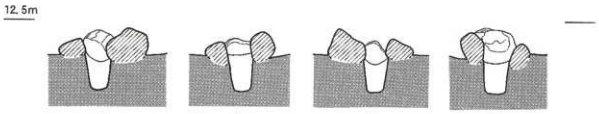


第8図　石蓋土壙墓実測図（S－1/20）

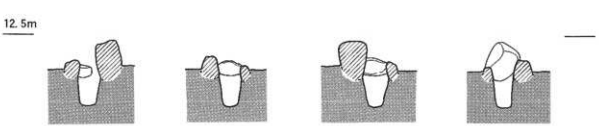


第9図　溝状遺構①とピット実測図（S－1/20）





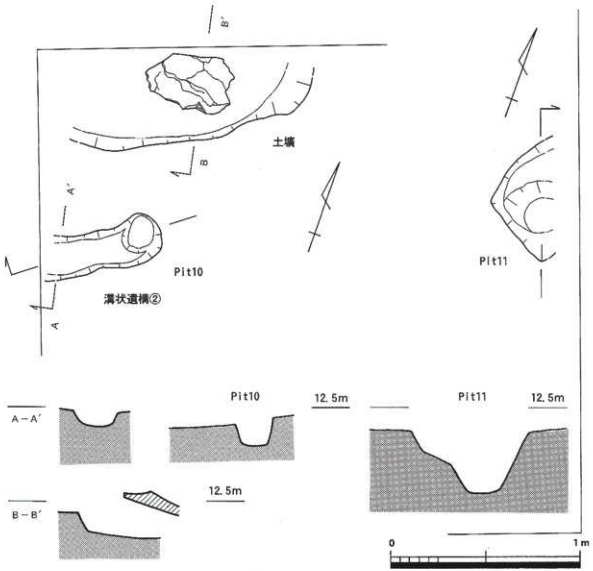
1号集石



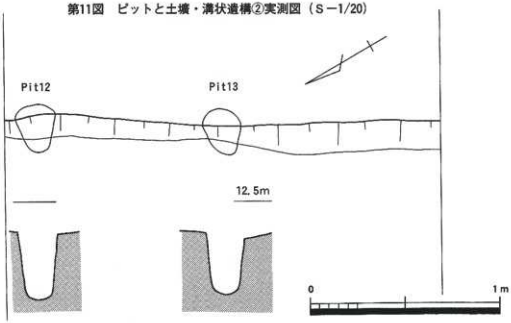
2号集石

3号集石

第10図　集石遺構実測図（S－1/25）



第11図　ピットと土壙・溝状遺構②実測図（S－1/20）



第12図　ピット実測図（S－1/20）

ピット７は直径20cm。溝状遺構①内の西端部にあり、溝状遺構面からの深さ20cm。溝状遺構底部からの深さ10cm。

ピット８は直径20cm、深さ10cm。溝状遺構①内の北側にある。

ピット９は溝状遺構①の東側にある。直径25cm。溝状遺構面からの深さ20cm。溝状遺構底部からの深さ10cm。

ピット10は溝状遺構②内の東端部にある。直径20cm、深さ15cm。

ピット11は７Ｔの東壁にかかる。直径60cm、深さ35cmで、途中で段差がつく。

ピット12・13は４Ｔのサブトレンチで検出された。ともに直径20cm、深さはピット12が35cm、ピット13が30cm。

８．土壙（第11図）

７Ｔにおいて検出された。トレンチ北壁にかかっており、全体像は不明である。深さは北端で15cm。上部に厚さ５cmの板状石があり、石棺の棺材の可能性もある。

第２節　遺　　物（第13・14図、図版８）

総数5,365点が出土した（第３表）。このうちの98％が土器である。他に鉄器やガラス小玉が出土した。器形、口径の復元できるものはわずかであるが、このうち38点について掲載した。

トレンチ	層　位	土　器	剥片・チップ	鉄　器	ガラス製小玉	陶　器	磁　器	計	トレンチ計
1	２層	20					1	21	1,874
	３層	1,841	1	1	1	6	3	1,853	
2	１号石棺（流入）	47						47	79
	１号石棺周辺	30						30	
	２号石棺（流入）	2						2	
3	埋土	14				1	3	18	317
	３層	278	2			5	3	288	
	ピット１	4						4	
	ピット２	1						1	
	ピット３	2						2	
	溝	4						4	
4	３層	24		1				25	25
5	３層	58		1				59	59
6	２層	22						22	73
	３層	51						51	
7	２層	473	2			3	12	490	899
	３層	394	2			3	1	400	
	ピット１	1						1	
	ピット２	7						7	
	３号石棺上壙内	1						1	
8	２層	652				3	7	662	1,706
	３層	1,032						1,032	
	１号集石	5						5	
	３号集石	1						1	
	ピット	6						6	
9	２層	178				1	2	181	333
	３層	152						152	
	計	5,300	7	3	1	22	32	5,365	5,365

第３表　トレンチ別遺物一覧表

１．土器（第13図）

甕形土器（１～13）

１、２は口縁部。１は内湾ぎみに立ち上がり、端部は内外面ともにわずかに肥厚する。口唇

部はナデにより凹部を形成する。内外面ともにナデ。2も内湾ぎみに立ち上がり、端部は外面にわずかに肥厚する。内外面ともにナデ。1、2ともに今福後Ⅴ期（弥生終末～古墳時代初頭）。3は頸部で、強く屈曲する。内面タテハケ→ナデ。外面は不明。今福後Ⅲ期（後期前葉～中葉）。4～7は肩部。4の焼成は堅緻で、断面が急角度な突帯がつく。外面タテハケ、内面ヨコハケ。5、6は2条の、先端が尖り気味のシャープな突帯がつく。5は外面タテハケ、内面ヨコハケ。7は器壁が厚く、コの字形の突帯がつき、刻目をつける。外面タテハケ、内面タテ、ヨコハケ。8は胴部で2条のM字形突帯に刻目をつける。9は胴部。1号箱式石棺墓の掘り方から出土。器壁が薄く、焼成は堅緻。外面タテハケ、内面ハケ→ナデ。内面には指頭による凹凸が見られる。外面に炭化物（煤）の付着が認められる。1、2と同じく布留式期。10は台付甕の底部。11・12は脚台部。13は小形甕の脚台部と思われる。

壺形土器（14～19）

14は面取りした口縁端部にV字状の刻み目を施す。刻み目は正目小口板でハケ調整の工具と同じものである。内外面ともにハケ→ナデ。今福後Ⅳ期（後期後葉）。15は短く屈曲し、端部は平坦である。内外面ともにナデ。16は複合口縁壺の口縁部。短く直立し、外部はナデにより凹部を形成する。今福後Ⅴ期（弥生終末）。17、18は平底の底部。17は器壁がうすく軟質の胎土。17、18ともに外面タテハケ、内面には指頭による凹凸が見られる。19は小形の直口壺。軟質の胎土で手持ちが軽い。胴部に黒斑が残る。頸部のつなぎ目は、沈線状にわずかに段がつく。外面手持ちのヘラケズリで脚台が付くものか。

高杯（20～23）

20は杯部。ゆるく内湾し、口縁部は外反する。外面ハケ→ナデ、内面ナデ。今福後Ⅴ期（弥生終末）。21・22は杯部～脚部。21の接合はホゾ式。22は充填式。23は裾部で外面タテハケ、内面タテハケ→ヨコハケ。

器台（24）

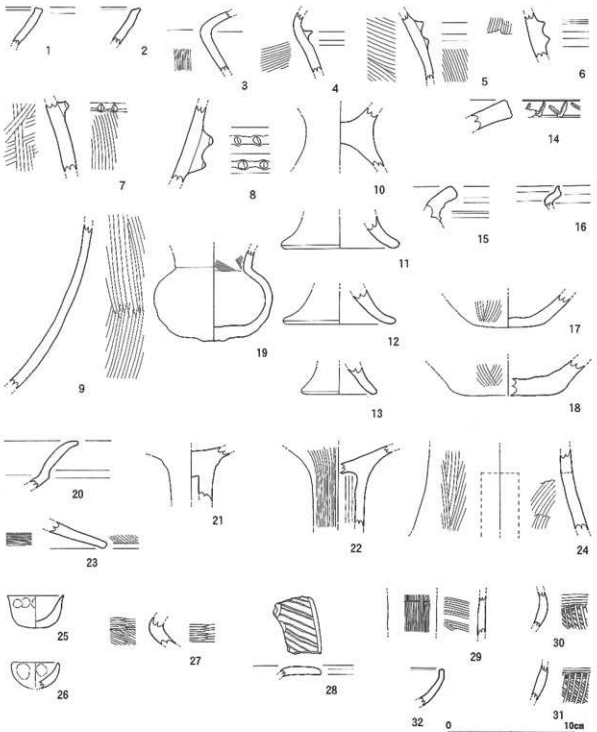
24は長方形のすかしをもつ器台。軟質の胎土で、内外面タテハケ。今福後Ⅴ期（弥生終末）。

手づくね土器（25・26）

25・26はミニチュアの鉢。ともに手づくねで、25は端部を摘みぎみにおさめ、わずかに外反する。26は内外面に指紋が残る。25は平底気味、26は丸底である。ともに今福後Ⅴ期（弥生終末）。

丹塗り土器（27～32）

27は壺形土器の頸部。内外面ともにヘラミガキ。28は壺形土器の口縁部で、上面の平坦部にナナメの暗文が施される。中期後葉か。29はタテ方向のヘラミガキを1㎜幅で端正に調整、内面はヨコ方向のハケ調整。壺形土器の口縁か。30・31は同一個体と思われる。外面は横位・斜位のハケ調整ののちにタテ、ヨコにヘラミガキ。下半のタテのヘラミガキは暗文風の効果も見てとれる。器形は不明だが小形の壺形土器か。29～31はいずれも金雲母を含む。32は小形の鉢の口縁部。端部に平坦面を有する。



第13図　土器実測図（S－1/3）

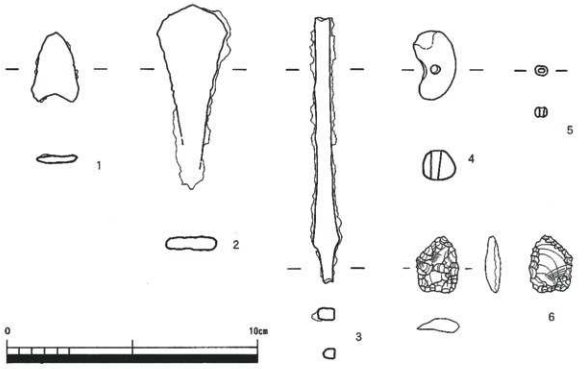
2．その他の遺物（第14図）

1～3は鉄鏃。1は無茎の凹茎鏃で抉りが浅い。2と3は有茎。2は有茎平根鏃（圭頭平根矛箭式）。3は有茎尖根鏃か。4は土製勾玉。5は水色のガラス小玉。6は石鏃で石材は黒曜石。

番号	器種	地区	トレンチ	層位	計量（cm）［ ］は現存 口径	器高	脚部	底径	調整 外面	内面	色調 外面	内面	備考
1	須恵土器	口跡区	9	3層					ナデ	ナデ	暗灰	灰色	
2	須恵土器	LI跡区	1	3層					ナデ	ナデ	黄褐色	明黄褐色	
3	須恵土器	前面	1	3層						ナデ→ケズリ→ナデ	黄褐色	灰色	
4	須恵土器	岸前	9	3層					ナデ→ケズリ	ヨコナデ	灰色	灰褐色	
5	須恵不足	岸前	1	3層					ナデ→ケズリ	ヨコナデ	暗色	褐色	
6	須恵不足	岸部	2	3層							明黄褐色	黄褐色	
7	須恵土器	岸部	7	3層					ナデ→ケズリ	ナデ・ヨコナデ	暗色	褐色	
8	須恵土器	脚部	1	3層							明色	褐色	
9	須恵土器	脚部	2						ナデ→ケズリ	ハケ→ナデ	肩→胴中褐色	暗色	上半右旋回転方向
10	須恵土器	組織→岸端	1	3層							灰褐色	灰褐色	
11	須恵不足	脚部	2	3層				(9.2)			灰褐色	灰褐色	
12	須恵不足	脚部	7	ピット2				(8.0)			暗色	明黄褐色	
13	須恵土器	脚部	1	3層				(6.0)			暗色	明黄褐色	
14	須恵土器	口跡区	8	2層					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗色	黄褐色	
15	須恵土器	LI跡区	1	3層					ナデ	ナデ	黄褐色	褐色	
16	須恵土器	LI跡区	1	3層					ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	
17	須恵土器	岸前	1	3層				(8.0)	ナデ→ケズリ		灰色	灰褐色	
18	須恵不足	底部	5	3層				(6.0)	ナデ→ケズリ		黄褐色	明黄褐色	
19	須恵不足	脚部→底部	1	3層			(9.5)		ヘラケズリ		明黄褐色	明黄褐色	台付か
20	高杯	杯部	1	3層					ハケ→ナデ	ナデ	暗色	暗色	
21	高杯	脚部	8	3層							明黄褐色	明黄褐色	
22	高杯	脚部	8	3層							明色	明色	
23	高杯	脚部	1	3層					ナデ→ケズリ	ナデ→ヨコハケ	暗色	暗色	
24	器台		1	3層					ナデ→ケズリ	ナデ→ケズリ	灰褐色	明黄褐色	赤彩塗すか
25	手づくね土器	口縁→底部	1	3層							赤茶色	暗赤色	
26	手づくね土器	口縁→底部	1	3層							明黄褐色	明黄褐色	
27	須恵土器	頂部	8	3層					ヘラミガキ	ヘラミガキ	暗赤色	明赤褐色	外面弓
28	須恵土器	LI跡区	8	3層							赤褐色	赤褐色	外面弓
29	須恵土器	LI跡区	8	3層					ヘラミガキ	ヨコハケ	暗色	暗色	外面弓
30	須恵土器		8	3層					ヘラミガキ		暗色	黄灰色	外面弓
31	須恵不足		8	3層					ヘラミガキ		暗色	暗灰色	外面弓
32	鉢	口跡区	1	3層							暗色	灰褐色	外面弓

番号	種別	トレンチ	層位	長さ	幅	厚さ	重さ
				cm			g
1	鉄鏃	5	3層	2.8	1.9	0.3	2.0
2	鉄鏃	4	3層	7.3	2.7	0.5	17.9
3	鉄鏃	1	3層	10.5	1.2	0.5	13.9
4	ガラス玉	1	3層	0.5	0.4	0.4	0.1
5	土製勾玉	1	3層	2.8	1.7	1.2	4.6
6	石器	7	2層	2.2	1.7	0.5	1.8

第４表　出土遺物観察表



第14図　その他の遺物実測図（S－2/3）

Ⅳ　まとめ

今回出土した箱式石棺墓のうち１号箱式石棺墓は、副葬品がなく具体的な時期については不明であるが、伸展葬が可能であるくらいに石棺が長大化しており、掘り方内で出土した土器（第13図９）や周辺で出土した鉄鏃（第14図２・３．註１の１号石棺墓に出土例あり。）から、古墳時代前期（４世紀後半頃）の築造と思われる。隣接する２号箱式石棺墓は、大小の石棺が主軸を揃えるという、「主と従」の関係が見て取れることから、１号箱式石棺墓に付随するもので、同時期と考える。

３号箱式石棺墓は、遺構面が１・２号箱式石棺墓より低く、石棺の長大化の傾向も見られないことから、これらに先行すると思われる。その時期は周辺から出土する遺物から見て弥生時代後期後葉～終末と思われる。石蓋土壙墓は一般的に弥生時代後期に盛行するという状況があり、３号箱式石棺墓と主軸を揃えることからも、同時期と思われる。以上から、３号箱式石棺墓・石蓋土壙墓→１号・２号箱式石棺墓という時間的変遷をたどることができる。

溝状遺構やピット、集石遺構などの時期については、３Ｔの溝状遺構・ピット４～９、ピット２が古墳時代前期、１号箱式石棺墓の掘り方を切っているピット１は古墳時代前期以降、３号箱式石棺墓の掘り方を切っているピット３は弥生時代後期後葉～終末、その他は弥生時代後期後葉～終末の所産であろう。

本遺跡周辺の弥生時代～古墳時代の遺跡についてであるが、小江川の東岸には中江遺跡、上田井原遺跡がある（註２）。中江遺跡では、本遺跡と同時期の弥生時代後期から古墳時代にかけての箱式石棺墓15基、石蓋土壙墓３基、石棺系石室１基の計19基が確認されているが、標高16～30ｍの丘陵上にあること、箱式石棺墓に石枕も持つこと、石蓋土壙墓の墓壙が２段掘りでないこと、など立地・構造の点で本遺跡との差異が見られる。

一方、境川の左岸には本遺跡のほかに、泉遺跡、西の前遺跡がある（註３）。泉遺跡では、幾何学的な線刻をもつ石材が発見され、かつては小高い丘があったことから、古墳が存在した可能性がある。西の前遺跡では古墳時代前期と思われる石棺が出土している。

古墳の構築法としては、①マウンド構築後、墓壙を掘る②マウンド構築と同時に埋葬施設を構築する（横穴式石室）③地中に埋葬施設を構築後、マウンドを構築する、の３種類に大別され、①ほど厚葬で③ほど薄葬と考えられる（註４）。この他に④マウンドを構築しない一般的な石棺墓群、がある。今回の調査は部分的なものであるため、墓域の構成については不明な点もあるが、本遺跡の１・２号箱式石棺墓は周溝（第９図の溝状遺構①）をめぐらせている可能性があり、小規模なマウンドが存在したかもしれない。箱式石棺墓群の中にあって唯一形態が異なり、石棺墓群からやや離れた箇所にある中江遺跡18号墓（石棺系石室か）や本遺跡１・２号箱式石棺墓は③の可能性があるが、両遺跡の時期以降、①あるいは②といった、③・④から隔絶した段階の古墳があるのは本遺跡のある境川流域であり、後続する遺跡数から見ても、境川流域がしだいに優位になっていったものと思われる。いずれにしても小江川・境川流域の古

墳時代前期は③・④の段階であり、③・④から隔絶した②の段階へ移るには6世紀末の善神さん古墳の登場を待たねばならない。このことは、大村湾沿岸では黄金山古墳・ひさご塚古墳など4世紀後半に既に①・②の古墳が築造されているのとは対照的である。有明海沿岸においてこのクラスの古墳が登場するのは、6世紀代の善神さん古墳（高来町）、長戸鬼塚古墳・大峰古墳（ともに小長井町）で、時期的に遅れるという状況が見られる。

有明海沿岸においては、古墳時代前期の本遺跡と後期古墳とをつなぐ時期の遺跡に乏しい現状であるが、今後の調査により、この地域での古墳時代を通しての様相が明らかにされていくことを期待したい。

註1　大野安生　1995『富の原遺跡・小佐古石棺群B地点Ⅱ』大村市文化財調査報告書第19集　大村市教育委員会

註2　高野晋司　1993『中江遺跡・上田井原遺跡』高来町文化財調査報告書第1集　高来町教育委員会

註3　高来町　1987『高来町郷土誌』

註4　竹中哲朗　2003「大村湾・橘湾沿岸の古墳・箱式石棺の検討」『西海考古第5号』西海考古同人会

【参考文献】

中間研次ほか　1998『貝元遺跡Ⅰ』福岡県教育委員会

中間研次ほか　1999『貝元遺跡Ⅱ』福岡県教育委員会

古門雅高　2005「有明海西岸地域における弥生時代後期の土器」『西海考古第6号』西海考古同人会

宮崎貴夫　1986『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第84集　長崎県教育委員会

田平徳栄　1990『惣座遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(11)　佐賀県教育委員会